



開館20周年記念Ⅳ ちひろと旅する信州

●2017年9月16日(土)～11月7日(火)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社

両親の郷里であり、いわさきちひろの心のふるさとであった信州。幼いころから晩年まで、ちひろは家族や友人とともに信州各地を訪れ、1966年には、黒姫に第二のアトリエともいえる山荘を建てています。東京育ちであるにも関わらず、自ら「信州人」とであると語るほど、ちひろはこの地を愛していました。本展では、原風景・信州のイメージから生まれた作品や、黒姫で描いた絵本、信州のスケッチなどを展示し、ちひろと信州の関わりを紹介します。

松本市・梓川村一終戦を迎えて

父・正勝は梓川村(現松本市)、母・文江は松本市新橋の出身でした。両親の里帰りの際には、登山や川遊びをするなど、ちひろは信州でのびのびと過ごしました。



図1 奈良井川のほとりで 妹・世史子(左)と 1922年

ちひろの娘時代は、日本が戦争へと突き進み、戦況が激化していった時代と重なります。1945年5月25日、東京・山の手の空襲で、ちひろと家族は東京・中野の家を焼け出され、母の実家のある松本に疎開します。8月15日、新橋から二次疎開のために向かった梓川村の父の実家で終戦を迎えました。ちひろが終戦の翌日から書き始めた「草穂」と題した日記の冒頭には、梓川から望む金松寺山が鉛筆で描かれています。ちひろは後に、当時の心境を「戦いがおわった日、心のどこかがぬくぬく燃え、生きていく喜びがあふれだした。忘れていた幼い日の絵本の絵を思いだし、こどものころのように好きに絵を描きだした」と語っています。その後、自らの生きる道を模索していたちひろは、翌年の5月、画家を目指して単身上京します。信州は若さちひろが画家になる夢を取り戻し、自立して生きることを決意した地でもありました。

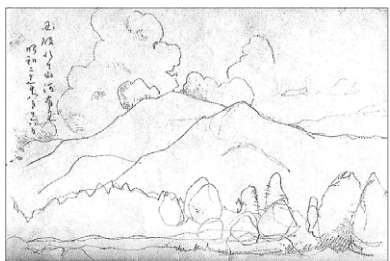


図2 日記「草穂」より 梓川村より金松寺山をのぞむ 1945年

松川村一わが子に会いに

安曇野の北端にある松川村は、戦後、両親が開拓農民として入植した土地でした。ちひろは松川村を度々訪れ、山並みや父母の暮らしなどをスケッチしています。

31歳のときに、ちひろは松本善明と結婚し、翌年、息子が誕生します。当時、職を失い、司法試験を目指して勉強中だった夫に代わり、家計を支えていたちひろは、絵の仕事に集中するため、乳飲み子だった息子を松川村の両親のもとに預けます。親子3人の暮らしを始めるため、東京で懸命に働き、お金が貯まると、車で8時間、電車で1時間、徒歩で40分かけて、息子に会いに何度も松川村に足を運んだ時期もありました。画机の前に貼っていた無垢な寝顔を描いたスケッチからは、「うしおのように流れだす愛情を、どうしようもなく」と記した息子への思いが感じられます。



図3 長男・猛 1951年

小谷温泉一「りゅうのめのなみだ」

古くから湯治場として親しまれ、深い谷合にある小谷温泉には、息子が幼いころ、毎年のように正月に訪れていました。



図4 小谷温泉・鎌池 釣り人 1965年

1965年、『りゅうのめのなみだ』を手がけるにあたり、ちひろは小谷温泉の旅館に逗留しています。宿の裏山を登ったところにある神秘的な鎌池や、道端の倒木、枯れ木、草花など、ちひろは宿周辺



図5 涙を流すりゅうと男の子 「りゅうのめのなみだ」(偕成社)より 1965年

の風景をスケッチしました。中国の山奥が舞台となったこの絵本には、小谷の自然が描きこまれています。

黒姫高原一第二のアトリエ

1966年、黒姫山の山麓に広がる信濃町の黒姫高原に、ちひろはアトリエを兼ねた山荘を建てます。ちひろの好みを生かして設計されたこの山荘を、春夏は「野花亭」、秋冬は「雪霽亭」と呼んでいました。四季折々の自然に出会える黒姫を、ちひろは毎年のように訪れ、絵本を制作しています。

『花の童話集』



図6 ひなげし 『花の童話集』(童心社)より 1969年

戦後間もないころ、宮沢賢治の文学に深く傾倒していたちひろは、50歳のときに、草花を題材にした賢治の童話6編を収めた絵本『花の童話集』を手がけます。この絵本は、ちひろの強い希望により、新緑の季節の黒姫山荘で制作されました。ちひろは、賢治が愛した岩手の自然を、黒姫の自然のなかに見出しながら、絵本のなかを描いています。山道を散歩し、「賢治も、こうして山道を歩きながら、木や花や草や鳥たちとおしゃべりしたんだと思うの」と語っていたちひろは、自然と対話する賢治のまなざしに、自らのまなざしを重ねていたので、この作品を「私の宮沢賢治解釈」と語っています。

『あかまんまとうげ』



図7 わらびを持つ少女 『あかまんまとうげ』(童心社)より 1972年

『あかまんまとうげ』の表紙には、鮮やかな若草色に包まれ、薄紫のすみれの花を髪に飾る少女の姿が描かれています。この絵本には、生命の息吹に萌える春の黒姫の情景が表現されています。黒姫の豊かな自然と、日常を離れて過ごす静かな時間が、ちひろの創作と心を支えていたことがわかります。(宍倉恵美子)

開館20周年記念Ⅳ〈企画展〉日本デンマーク国交樹立150周年 イブ・スパング・オルセンの絵本展

●2017年9月16日(土)~11月7日(火)

主催：ちひろ美術館、メディアリンクス・ジャパン、信濃毎日新聞社
後援：デンマーク大使館、こどもの本 WAVE、絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会

デンマークの画家、イブ・スパング・オルセンの展示を、今年春のちひろ美術館・東京の展示に続き、安曇野ちひろ美術館でも作品を入れ替えて開催します。

オルセンの画業は、新聞のためのイラストレーションに始まり、ポスター、アニメーション映画、壁画、切手、彫刻、舞台美術と幅広く、デンマークの人ならば、どこかで必ず彼の作品を目にしているともいわれます。特に、本は600冊近く手がけたといわれています。本展では、そのなかから絵本を中心に原画を展示、紹介します。

絵本を手がけるまで（絵本以外の仕事）

1921年、デンマークの首都コペンハーゲンのオステルプロ地区に庭師の三男として、オルセンは生まれます。彼はこの地区で過ごした少年時代を、自伝『オステルプロからきた少年』に綴っています。1932年のFrihavnen（コペンハーゲンの港）の絵には、寄港している外国船に乗り込み、デンマークのマッチと、外国のマッチを交換したいがために、初めて覚えた外国語で話す少年時代のオルセンの姿が描かれています。（図1）

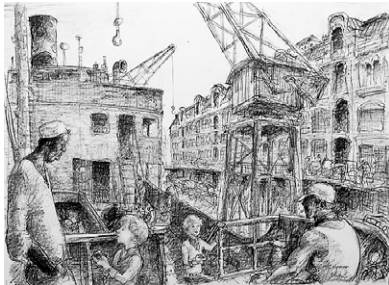


図1 『オステルプロからきた少年』より 1980年

オルセンは、その後1948年から教師として働きながら、新聞の日曜版にイラストレーションを描き続けます。最初の子どものための絵本は『5ひきのトル』(本展未出品、邦訳版 絶版)でしたが、残酷なストーリーに、評論家には、不評だったとオルセンは後に記しています。

ポスターの仕事も、オルセンが長年取り組んでいたものです。彼の政治や社会、環境への高い意識は、ポスターという大きな画面に乗って、デンマークの人々へと伝わっていきました。1998年にはデンマークポスター美術館にて彼のポスターの特別展も開催されています。「エネルギーを節約しよう」(1975年)は、そのなかでも代表作ともいわれる作品です。(図2)画面の左手前で、少女は窓越しに町を眺めながら、右手で暖房の温度を低くしようとしています。画面全体には夕暮れの町が描かれていますが、よく見ると、道の左側の建物の窓ごしに入

浴している女性、屋根の上の煙突掃除夫、道路でボール遊びをする子どもたちなど、さまざまな人がいます。さらに、人々のそばには小さな手書き文字で、「お風呂よりシャワーを」「煙突はきれいに」などと、エネルギーを節約するための助言がちりばめられています。



図2 ポスター「エネルギーを節約しよう」1975年

オルセンの絵本

オルセンの絵本で、日本や海外で特に知られているものに、『つきのぼうや』が挙げられるでしょう。本の縦長の判型が印象的なこの本は、もとは新聞の日曜版のために描かれたお話が始まりでした。細長い画面を切ってつなげ、両端を棒に巻きつけ、縦型の巻物のように動かして遊ぶことを想定してつくられたストーリーは、月から地上へ下り、また空へ戻っていく男の子の冒険です。縦長の画面と、青い空を背景にした黄色い月の色のコントラストが印象的なこの本は、リトグラフの一種であるヘリオグラフィーという手法によってつくられ、色は印刷の段階でつけられたために、原画はモノクロの線だけがフィルムに描かれたものです。(図3)少し揺れのある、オルセン独特の線は確実なデッサン力に支えられています。

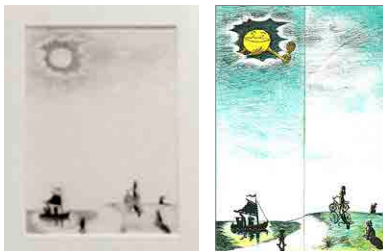


図3 『つきのぼうや』より 1962年(左:原画 右:絵本)

デンマークの自然と、オルセンのユーモアが生んだ傑作ともいえる絵本が『ぬ

まばさまのさげづくり』です。『つきのぼうや』同様、最初は新聞に発表されたものが、後年絵本化されました。夏の夜に、沼地からもやが立ち上がる現象を、デンマークでは「ぬまばさまが、酒をつくっている」というそうですが、オルセンは、当時幼かった息子とともに、それを、あたかも古来から言い伝えられている昔話のように仕立て、さまざまな個性的な登場人物をつくりだし、季節のうつりかわりを表現しながらまとまったストーリーとして描いています。1981年には短編アニメーション映画となり、オルセン自身がセル画を描き、ナレーションを行いました。(図4)



図4 『ぬまばさまのさげづくり』より 1966年

デンマークのアンデルセン、オルセン

アンデルセンと同じ母国デンマークに生まれたオルセンにとって、アンデルセンの話に絵を描くことは特別な意味をもつようです。既に1950年代から、アンデルセンの童話に絵をつける仕事はしており、1972年には国際アンデルセン賞画家賞を受賞していますが、福音館書店から、『アンデルセンの童話』の絵の依頼を受けたときのことを、オルセンはこう記しています。「アンデルセンの世界を描くことは至難のわざでした。わたしは何度も、他ならぬアンデルセンに手助けを求めたくなりました。一体この箇所をどう描いたらいいのかと、直接彼に教えてもらいたかったのです。」

そのような苦悩を感じさせない、躍動感あふれるこの絵の中央には、お姫さまの婿に選ばれようと用意周到な兄ふたりを尻目に、馬をもらえずヤギに乗った無

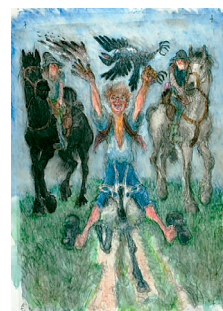


図5 『アンデルセンの童話』より 1992年

邪気な弟のハンス。(図5)両手を上げ、こちらに突進してくるハンスの声まで聞こえてきそうです。

オルセンの力作の数々をお楽しみください。

(松方路子)

開館20周年記念Ⅳ ちひろ美術館コレクション よりどりみどり 世界の鳥

●2017年9月16日(土)~11月7日(火)

今年は12年に一度の酉年。鳥は古代から人間とともに生き、空を舞ってきました。本展では、ちひろ美術館コレクションのなかの鳥たちに注目します。

人になる鳥

エフゲーニー・ラチョフが描くロシア民話『きつねとつる』では、動物たちは人間のように服を着ています。きつねは、つるを食事に招待しますが、食べづらい平らな皿におかゆを入れて出したので、つるは食べられずに帰ります。次につるがきつねを招待したときには、細長いつばにスープを入れたため、きつねは手が出ません。無念そうな顔のきつねと平静なつるが、壺を中心に対照的に描か



図1 エフゲーニー・ラチョフ(ロシア)『きつねとつる』より 1967年

れています。ラチョフの動物に対する確かな観察や構図の妙が、見てとれます。同じつるでも、日本民話の『つるにようぼう』は、助けられたつる

が、美しい女の姿に変身して現れ恩返しをする話。絵本の表紙絵として、赤羽末吉は和紙に、はたを織る娘と空中に舞うつるの羽根を描きました。小さい羽根の数々が、つるが自分を犠牲にして、はたを織っているということを暗示しています。



図2 赤羽末吉(日本)『つるにようぼう』より 1979年

象徴としての鳥

鳥は人に変化するだけでなく、それ自体が、シンボルとしても、登場します。

チャールズ・キーピングの『しあわせどおりのカナリヤ』では、黄金のカナリヤは幸せの象徴です。ビルの建設により外で遊べず、離ればなれになってしまったふたりの子どもたちを、自由の身になったカナリヤがつなぎます。この表紙絵は、その幸せな結末を、見事に表現して

います。ことばを話さずとも、カナリヤはその存在だけで主人公です。

一方、ユゼフ・ヴィルコンの『森のコンサート』に登場する鳥たちは、それぞれどの



図3 チャールズ・キーピング(イギリス)『しあわせどおりのカナリヤ』より 1967年

鳥が一番美しい歌を歌えるかを競い合います。ヴィルコンは、色とりどりの鳥たちを、深い緑色の森の背景に描き、それ



図4 ユゼフ・ヴィルコン(ポーランド)『森のコンサート』より 1979年

ぞれの奏でるメロディーがあたかも聞こえてくるようです。声のみならず、姿かたちも多様な鳥は、他と比べることの愚かさをも語っているようです。

(松方路子)

〈活動報告〉7月29日(土) 松本猛講演会 母・いわさきちひろの歩み

開催中の「いわさきちひろの歩み」展に関連し、一人息子で美術評論家の松本猛による講演会を行いました。今秋、ちひろ研究の集大成となる『いわさきちひろ 子どもの命を見つめて』(講談社)を刊行するに先立ち、執筆のなかで新たに発見したことや、母との思い出を語りました。ここではその一部を紹介します。

『戦火のなかの子どもたち』

母からいっしょに絵本を作らないかと言われたときは、生まれて初めて認められたようで嬉しかった。あの時間がなければ、いわさきちひろという人間を深く知ることはなかっただろうと思います。

ベトナム戦争では、世界中のあらゆる分野の人たちが反戦の意を表した。ちひろは『戦火のなかの子どもたち』を制作することで問題提起をしました。自身の戦争の記憶が挟み込まれているこの絵本を通して、戦争を起こしたものに対する

激しい怒り、子どもを守らなければいけないという強い意志を伝えようとしたのだと思います。

画家・いわさきちひろの誕生

ちひろの父・正勝は俳句や和歌、小説も書く文学青年で、絵も上手でした。ちひろと仲が良く、大きな影響を与えました。一方、母の文江は女学校教師で、博物(理科)・家事を教えていました。植物の研究にも熱心で、初めて白馬岳に登った女性の一人だと言われています。二人は手をつないで街を歩くなど、当時としてはめずらしい自由な雰囲気があり、そんな両親の影響で、ちひろは感性豊かに育ちました。

女学生時代には、当時の画壇の権威である岡田三郎助のもとへ毎日のように通い、文化レベルの高い環境で学ぶ場を得て、いわさきちひろという人間の基礎となる貴重な経験をしています。

ちひろの絵が伝えたいこと

ちひろは、人間が作り出すことのできない自然の息吹や、空気的美しさを大切にしていた人。にじみや筆の勢い、余白を工夫して、それらを表現していたのだと思います。(中略)目に見えない、絵の外側に溢れている愛情こそ、ちひろの描こうとしていた世界ではないか。今日までちひろの絵が多くの人に愛されつづけている理由は、子どもは愛されなければいけない、そのためには本当に平和でなければいけないという、ちひろと同じ思いを持つ人たちに支えられてきたからだと感じています。(畔柳彩世)



〈活動報告〉8月26日(土) 夜のミュージアム

年に1度、21時まで開館する「夜のミュージアム」。安曇野ちひろ公園では、「すずむし捕り」や「肝試しと野宿体験」を開催。美術館の絵本の部屋では、絵本作家・あおきひろえ with なるパンダさんによる「絵本&落語ライブ」を行いました。落語の演目は、冷蔵庫のなかの食材を擬人化した「冷蔵庫哀詩」(桂



あおきひろえさん なるパンダさん

小春団治 作)と1万円得トラとして雇われた男性が、トラを演じていたら本物

の!?ライオンがやってきて…という「動物園」。おふたりの巧みな話術や悲喜こもごもの表情・動きに、会場内は笑いに包まれました。絵本ライブでは、歌に合わせて大阪弁を教わったり、あおきさんの絵本『かみなりどんがやってきた』にそった手遊びをしたり……。楽しいひとときとなりました。(田邊絵里子)

トットちゃん 広場より

Ⅳ トットちゃん広場のひみつ



弁当を食べるおさげ髪の少女
1958年

最終回の今回は、トットちゃん広場の散策がもっと楽しくなる、「ひみつ」をご紹介します。

ひみつ①

トットちゃんの机



トモ工学園の授業のようすを見学できる「デハニ 電車の教室」。時間割りが決まっていなかった教室では、絵を描く生徒の隣で植物の観察をしていたり、そろばんをはじめていたり…。作文が得意だったトットちゃんの机や物理が好きな泰ちゃんが実験をしている机も再現されています。ぜひ物語を思い出しながらい見学してください。

ひみつ②

鉄条網



トットちゃんが大好きだった遊びは、よその家や原っぱの垣根をくぐる。「鉄条網」をくぐって、パンツを破いていました。トットちゃん広場にもトットちゃんが好きそうな鉄条網があります。探してみてくださいね。

ひみつ③

トモ工学園の写真



とてもユニークな教育方針のトモ

工学園。運動会や温泉旅行、講堂での野宿のようすが写真で残されています。いきいきとした姿からは、楽しそうなトモ工学園での生活を垣間見ることができます。

ひみつ④

パタパタ机



トットちゃんが最初の学校で授業中にパタパタしていたふた付きの机。長野市の旧信田小学校からいただいた貴重な机です。「こんな机だったんだね」「懐かしいわ」と、声があがります。好奇心旺盛なトットちゃんを想像して、会話も弾みます。(宮木慧美)

ひとこと ふたこと みこと



7月18日(火)

ちひろ美術館は3度目です。来館する度に心が洗われます。今年は、トットちゃんの電車の教室も見学できてよかったです。ここでたっぷり5時間も過ごしたのは初めてです。(大阪・青淵孝子)

8月3日(木)

27歳の誕生日にちひろ美術館に初めて来ることができて、本当によかったです。ちひろさんが27歳で新しい一歩を踏み出したように、私も頑張ろうと力をもらいました。子どものしあわせと平和を願うちひろさんの想いと、夢のような甘さが漂う絵が大好きです!

8月14日(月)

長野には何度も訪れていたものの、初めて来て、楽しくて、こんな場所があったのかとびっくりし

ました。アートを身近に感じることができ空間づくりのありがたさを感じました。(ナガ)

8月15日(火)

8月4日に、大分県別府市を出発して、車で日本一周の最中に来ました。両親(一弘&知子)がちひろさんの絵が好きで、私の名前もちひろ(千弥)になりました。福井県の道の駅にあったチラシで、「ちひろの生まれた家」記念館のことを知り、行ってみたいところ、そちらのスタッフの方に、この美術館をすすめられました。来てよかったです。東京の美術館にもぜひ行ってみたいです。ちなみに、私も左利きの長女です。(ちひろ)

【日本の絵本100年の歩み 感想ノートより】

7月15日(土)

普段なかなか見られない絵本の原

画にお目にかかれて、一枚一枚、じっくりと見せてもらいました。自分の持っている大切な絵本の一枚が何枚かあって、感動しました。絵本が大好きで、今回は3度目ですが、年を重ねていくなかで、好きな絵も変わりました。前回来たときはこの絵が一番だと思ったよな〜とか……、いい時間を過ごさせてもらいました。次はいつになるかわからないけれど、また絶対に来ます。(S.K)

7月24日(月)

岩さきさんや、ほかの絵本作家の人の絵をみれてよかったです。私が好きな丸木ふさいの絵本を通して、ここにくる人々が、せんそうのこと、せんそうをくり返してはいけない、と思うことをねがっています。(東京都10才みより)

美術館 日記



7月4日(火) ☔

ちひろ美術館の公式HPがリニューアル。写真や画像を大きくし、デザインを一新、スマートフォンにも対応。初めてHPを訪れた人にも、ちひろがどんな人だったかを、わかりやすく紹介している。更新をしながら、より魅力的なHPに育てたい。

8月6日(日) ☀

前日までの台風による豪雨が嘘のような快晴で迎えた「朝のミュージアム」。カフェテラスは「朝の



おはなしの会」を、トットちゃん広場では、「朝の音楽会」を開催。両方に参加された、あかちゃんを連れとお母さんからは「満喫できました!」と嬉しい声が寄せられた。

8月10日(木) ☀

開館40・20周年の今年、長年の念願だった「いわさきちひろ作品目録」の刊行に向けて、準備が進行中。学芸の担当者と印刷会社では原画のスキャン作業やレイアウトについて検討を重ねてきた。本日、色校正の試作が届く。ちひろの全作品リストと約3500点の図版が掲載予定。3月の刊行が楽しみだ。

8月16日(水) ☀

恒例の中学生ボランティアは1日から今日までの16日間で、約2000人のお客さまが参加された。ワー

クショップは、水彩技法体験と2種類の折り紙。折り紙ワークショップでは、男子中学生がしゃがみ込み、幼児と視線を合わせて、丁寧に接するようすが微笑ましい。ガイドツアーは、クイズ形式で進行。連日30℃を超える暑さのなか、額に汗をかきながら中学生が出題すると、参加者はAかBの札を上げる。大いに盛り上がる姿に、トットちゃん広場の電車を見学されている方からも「楽しそう!」「参加したいね」との声が上がっていた。



安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
 詳細・最新情報はホームページからご覧いただけます。 chihiro.jp TEL. 0261-62-0772 FAX 0261-62-0774
 f https://www.facebook.com/chihiro.azumino 安曇野ちひろ公園 TEL. 0261-85-8822

●**展示関連イベント**

10月7日(土) ちひろと旅する“おいしい”信州

いわさきちひろが描いた信州を、当館学芸員によるギャラリートークと、松川村の味覚でお楽しみいただける体験企画です。松川村のブランド米「鈴ひかり」のおにぎりづくりと、松川村の若手農家「あっぱるぼーいず」による、りんごトーク&りんご狩り体験をお楽しみください。

- 日時：10月7日(土) 10:00~14:00
- 集合場所：安曇野ちひろ美術館
- 参加費：1500円
(入館料別、りんごのおみやげ付)
- 定員：15名
※動きやすい服装でお越しください。
- 申し込み：要事前予約
(ちひろ美術館 HP、TEL.0261-62-0772、美術館受付にて)



●**10月28日(土)**

北アルプス山麓 りんごの小径ウォーキング 秋

主催：松川村観光協会・ウォーキング部会
 北アルプス連峰の眺望が美しい清流 乳川の遊歩道や史跡、りんごの小径をめぐるウォーキングイベント。地元ガイドによる案内や村民によるもてなし、りんごのもぎ取りなど楽しい体験のほか、トットちゃん広場にもご案内。松川村の魅力満載、秋限定のウォーキングイベントにぜひご参加ください。

- 日時：10月28日(土)
9:00~12:00 (小雨決行)
- 集合・解散場所：安曇野ちひろ公園
- 参加費：1000円 (保険料込み)
- 定員 60名
- お問い合わせ・お申し込み先
：松川村観光協会
TEL.0261-62-6930
- 申し込み〆切：10月23日(月)



●**9月18日(月・祝) 敬老の日**

この日は、65歳以上の方は入館無料です。

●**9月24日(日) 白馬村・小谷村民入館無料デー**

白馬村・小谷村にお住まいの方は、入館無料です。
 ※ご住所のわかるものを受付でご提示ください。

●**10月22日(日) 信州人集まれ！
長野県民感謝デー**

開館から20年間の感謝の気持ちを込めて、この日は長野県にお住まいの方は入館無料です。開館20周年記念のポストカード(非売品)もプレゼントします。※ご住所のわかるものを受付でご提示ください。



いわさきちひろ 木の葉の精 1968年

●**安曇野ちひろ美術館20周年！おめでとう20歳！**

開館20周年を迎えた2017年、美術館と同じ20歳の方は特別に入館無料です。※生年月日のわかるものを受付でご提示ください。

●**開館情報**

建物改修工事のため、2017年11月8日(水)より、2018年2月末日まで冬期休館となります。

●**2018年、いわさきちひろは生誕100年を迎えます**

ちひろ美術館では、生誕100年記念として、現在活躍中のさまざまな分野のアーティストといわさきちひろがコラボレーションする展覧会を企画しています。2017年11月、ちひろ生誕100年の特設WEBサイトで情報公開。どうぞ、ご期待ください。

●**11月4日(土) ちひろの水彩技法体験**

水彩絵の具でにじみづくりを体験したら、にじみの紙を表紙にした「じゅばらノート」をつくりましょう。

- 日時：11月4日(土)
10:00~11:30
- 会場：多目的ギャラリー
- 参加費：300円(入館料別)
- 定員：10名
- 対象：小学生以上
- 申し込み：要事前予約
(ちひろ美術館 HP、TEL.0261-62-0772、美術館受付にて)



●**いわさきちひろ生誕100年プレ企画・ピエゾグラフィ展
いわさきちひろと母文江が過ごした武生**

主催：越前市武生公会堂記念館、ちひろ美術館
 1918年、母文江の赴任した武生でちひろは生まれました。生誕100年プレ企画展として、母文江と武生とのかわりなどの紹介とともに、ちひろの描いたあかちゃんや子どもを中心としたピエゾグラフィ作品を展示します。
 ○会期：2017年10月6日(金)~11月5日(日)
 ○会場：越前市武生公会堂記念館
 ※お問い合わせ：0778-21-3900



●**おはなしの会**

毎月第2・4土曜日 11:00~
 展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせや素話などをおこないます。
 (参加自由、入館料のみ)

●**ギャラリートーク**

毎月第2・4土曜日 14:00~ちひろ展、14:30~企画展
 展示室で作品を見ながら、担当学芸員が展覧会の見どころなどをお話します。
 (参加自由、入館料のみ)

CONTENTS <展示紹介> ちひろと旅する信州…② <企画展> 日本デンマーク国交樹立150周年 イブ・スパンク・オルセンの絵本展…③ / ちひろ美術館コレクション よりどりみどり 世界の鳥…④
 <活動報告> 7/29(土)松本猛講演会 母・いわさきちひろの歩み / 8/26(土)夜のミュージアム トットちゃん広場より / ひとつことふたことみこと / 美術館日記…⑤

美術館だより No.92 発行2017年9月7日